全部「おい、○○」になったら、それはそれで相当に気持ちの悪いものになるだろう。

もう一つ、とっておきのスキルがある。山下が葬式でお棺の中に花を入れたとき、花びらが散って、おばあさんの鼻の上にのる場面だ。

その花びらは黄色だったろうと、なぜだかぼくは思った。

散る菊をことさら「黄色」にする必要はない。しかし、そう描く。（おいおい、葬式なんだから、だいたいは白だろう）なんて、ツッコミを与えるヒマもない。読み手は、おばあさんの鼻の上に散ってのっている一片の黄菊の花びらをあざやかに思い浮かべる。一見ムダな言葉が必要以上にイメージをふくらませる好例だ。

誤解を避けるために言っておくが、ぼくはこうしたスキルをダメだと言っているわけではない。うまく使えば、この上なく上等な料理になる。

## ＊『夏の庭』vs.長崎源之助

この『夏の庭』に、長崎源之助がかみついた。

長崎は、『夏の庭』という作品の《戦争のあつかい方》に疑問をもち、異議をとなえ発言をした。残念だったのは、この作品に日本児童文学者協会新人賞をあたえた選考委員が、だれひとりとして、回答あるいは反論をしなかったことだ。論争は立ち上がることなく消えていった。

ぼくは、長崎はカレーショップ『夏の庭』に入って、とまどってしまったのだと思う。

九〇年代のわりとはやい時期に、ぼくは転勤した。勤め先の同僚に連れられて、駅近くのカレー専門店に行った。最初に辛さのランクを決めた。次に、店員が「トッピングは何にしますか」ときいてきた。ぼくは一瞬「え？」と問い返し、「いいです」と答えた。食べながら席に置いてあるメニューを見たら、トッピングがずらっとならんで書かれていた。「ベーコン、えび、アスパラガス……」

ぼくはだいたい自宅食事派で、昼も給食だったので、そもそも外食といったものがほとんどない。そのためか、トッピングのカレー屋に入ったときのカルチャーショックはけっこう大きくて、今でも覚えているくらいだ。

長崎は、そんなおしゃれなトッピングのカレーショップに入って、とまどってしまったにちがいないのだ。

カレーといえば、よく煮込んで、しかも一晩おいたものがおいしいと思っていた長崎は、次から次へとくりだされるトッピングにも、おどろいていったかもしれない。しかし、それだけではなく、自分がいつもじっくりと煮込み、一晩なべ止めしてから出していた戦争を、『夏の庭』カレーショップは、いとも簡単にトッピングの一つとして出し